

気象学会若手第1回夏の学校の報告

第1回夏の学校実行委員会*

気象学会若手有志による「第1回夏の学校」を、1990年8月4日から6日までの3日間、長野県伊那市にある信州大学農学部手良沢山演習林宿舎で行った。参加者は、北は東北地方から西は近畿地方までの8大学、4機関、2企業からの37名であった。以下、その概略を報告する。

1. 開催の趣旨ならびにその経緯

この夏の学校の開催が提案されたのは、1990年春の学会懇親会後の若手有志による集まりの席であった。春と秋に開催されている年二回の大会は、研究に関する議論や情報交換をする場としては十分満足のゆくものではない。そこでそのような場を長期の休みがとれる夏に新たに作り、少しでも自分たちの研究の糧にできればというのがその趣旨であった。

この提案はその場において多くの賛同を得、2日後には実行委員会が組織されるまでに至った。6月上旬には開催の呼びかけを行うとともにアンケートを各大学に発送し、106通にもおよぶ回答を集めることができた。ほぼ全員が夏の学校の開催に賛同し、77名が参加を希望するという結果であった。アンケートの回答を参考にし、できるだけ広い分野にわたる話題提供とそれに基づく自由な議論の時間を設けるということを今回の夏の学校の基本方針とすることに決め、準備を進めていった。

2. 日程概要

8月4日夕刻、参加者が三々五々宿舎に到着し、夏の学校の開講となった。まず自己紹介を行った。OHPを

用いた本格的なものも多く、深夜2時にまで及んだ。

2日目は朝から8名の方々に話題提供として自分の研究とその周辺のレビューをしていただいた。当初は一人の持ち時間を30分くらいと見込んで、午後は自由討論に当てる予定であったが、日頃接していない分野の話がわかりやすく聞けるとあってしばしば議論が白熱した。そのため予定の時間を大幅に超過して、発表と質疑応答を一通り終えたのが18時すぎであった。その後、夕食兼懇親会が深夜まで続いた。

3日目午前中には今回の反省点と来年以降の開催について討議した。最後に来年(1991年)の世話役として京都大学を中心とする有志を選出して解散となった。

なお、2日目と3日目の朝食前には希望者による演習林の見学が、終了後には有志による AMeDAS 施設等の現地見学会があり共に好評であった。

3. 話題提供の内容

2日目の話題提供のテーマは以下の通りである。

- (1) 大気・植生間のエネルギー交換
渡辺 力(東北大・理)
- (2) 大気微量成分の光学的リモートセンシング
田口 真(東北大・理)
- (3) 足尾荒唐地と地球環境問題
一ノ瀬俊明(前橋営林局, 現所属: 東大・工)
- (4) 気候システム研究の現状と将来
(大気を中心として) 沼口 敦(東大・理)
- (5) 気候システム研究の現状と将来
(大気海洋結合を中心として) 山中康裕(東大・理)
- (6) 南極での体験談
掛川英男(筑波大・地球科学)
- (7) 日本付近の雲量極大ゾーンの季節変化と年々変動
平沢尚彦(名大・水圏)
- (8) 大気重力波の研究の現状
佐藤 薫(京大・理)

* 鳥谷 均 (防衛大学校地球科学科, スイス工科大学), 桑形恒男 (東北大学理学部), 沖 大幹 (東京大学生産技術研究所), 高田久美子 (東京電力技術研究所), 沼口 敦, 山根理子, 山中康裕(東京大学理学部), 牛山素行 (信州大学農学部)



写真 1 宿舎前での記念写真

まず渡辺氏による植生と大気との運動量や熱や水蒸気の交換過程の特徴を観測とモデルの両面から理解するという話に始まり、田口氏の大気微量成分を光学的に測定する各手法とその応用に関する明快な説明が続いた。次に一ノ瀬氏が鉱害に侵された足尾の山々の復旧の歴史を題材に環境保全等について議論を展開した。沼口と山中はそれぞれ大気と海洋の大循環モデルの現状と今後考えるべき点についての紹介を行なった。掛川氏は南極越冬隊で行なった観測の様態等を臨場感あふれるビデオやスライドで示した。平沢氏の発表は雲量の季節変化についての最新の解析結果の紹介であった。最後に佐藤氏が自分の研究成果を随所に取り入れて大気重力波の観測的研究についての包括的なレビューを行った。

紙面の都合でここには掲載できないが、各発表者に書いていただいた発表内容のまとめがあるのでご希望の方は東大理学部地球物理・沼口までお問い合わせ願いたい。

4. 今回の反省点

今回は気象学に関する分野をできるだけ広くカバーしようとしたため、日程に比べて話題提供の題目が過剰となってしまった。さらに議論を極力さげざらないように進化したので、当初予定された自由討論やテーマ別討論会などを行なう余裕がなくなった。これらの点については反省会でも改善を求める声が多かった。今後、

- ・発表の件数ならびに時間を短くし、討議の時間を長く取る。必要に応じてテーマ別の討論会を設け、より深く内容について議論するようにする。
- ・初日や最終日をより有効に活用して、全体の時間に余裕を持たせる。場所の選定に際しこの点も考慮する。などの改善策が考えられる。

自己紹介については、長時間にわたり拘束され睡眠時

間を奪われたことに対する批判が強く寄せられた。その一方、相互交流の良ききっかけとなったし、とてもおもしろかったとの意見も多かった。多くの参加者の強い意気込みが感じられたので、なんらかの形でこうした企画は存続させるべきであろう。

そのほか、今回ほとんど実現されなかったレクリエーション的な時間を求める声も多い一方で、より深い学術的な交流を望む意見も少なくなかった。

今回は参加費1万円の他、交通費も完全自己負担であった。本州以外からの参加者がなかったのは、その点が妨げになったとも考えられる。遠方からの参加者に対する金銭的補助についても検討されたが、資金源をどうするか等の問題があり明確な結論は出なかった。この点については次年度以降の幹事の判断に任されることになる。

5. 来年度へ向け

今回はいくつかの問題はあったが、初回としてはまずまずの成功であったといえる。今後回を重ねて運営の経験が積み重ねられていくことが必要であろう。その年ごとの運営方針によって特色ある会合が持たれることが望まれるが、「主として研究上の話題に基づいて、若手研究者の交流をはかる場を提供する」という発起スタッフの目的意識は今後とも受け継がれてゆくものと確信する。発案から実施に至るまで極めて性急なスケジュールであった今回と異なり、次回はさらに実り多い会合が期待される。それには若手のみならず全気象学会会員の皆様の理解と支援が必要だと考えられる。蒔かれた種が大きく育てていくように、暖かいご支援とご協力をお願いする次第である。

最後になりましたが、この夏の学校にご協力くださった皆様に、スタッフ一同心よりお礼申し上げます。